

## 幼児期から児童期における子どもの思考の共有・深化に関する研究

細野 美幸（短期大学部初等教育学科・准教授）

小泉 裕子（短期大学部初等教育学科・教授）

幸喜 健（短期大学部初等教育学科・准教授）

関川 満美（短期大学部初等教育学科・講師）

### 問題

OECDによるPISA型調査の結果から、日本の子どもの問題解決に対する意欲の低さが指摘され（OECD, 2012）、多くの子どもが複雑な問題に粘り強く取り組むことを避ける傾向にあることが明らかになった。しかし、社会情勢がますます複雑化・グローバル化していく中、未来を生きる子どもたちにとって、多様なニーズに対して試行錯誤し対応していくスキルや能力・価値観が必要になるであろうことが予想される。このような状況において、日常生活の様々な問題や葛藤場面について自分なりに思考し、考えを深め、発展させていく力を育むことは、幼児期・児童期の教育に求められる重要な課題だと言える。

子どもたちの思考力の発達を促す可能性のある要因のひとつとして、先行研究から「人との関り」をあげることができる。例えば、ヴィゴツキー（Vygotsky）は、発達理論「発達の最近接領域」において、子どもの発達を促すものとして他者との関わりが重要であると述べており、日本の幼児教育・保育に関する研究からは、青年期と異なる幼児期独特の思考力の発揮の仕方として、保育者や他児等の「人との関わり」が重要である可能性が示されている（内田・津金, 2012）。また、幼児期の終わりごろになると、園生活において、子どもたちがいるグループ活動の中で目的を見出し、それに向けて実現していったり、そのプロセスを通して工夫や協力の仕方を学んでいったりすることが出てくる（無藤, 2011）。このような活動のことを「協同的活動」と呼ぶが、特に協同的活動における子ども同士の話し合いや保育者の関わりが、幼児の思考の深化を促すことを示す研究もある（Dahlberg & Moss, 2006；佐藤, 2018）。

一方で、児童期に入ると子どもの社会性・協調性がいったん低下することが示されており（田村・荒牧, 2012）、人との関わり方が幼児期から児童期にかけて変化する可能性が考えられる。人との関わり方が変化すれば、おそらく、協同的活動の質も変化するだろう。幼児教育から小学校教育への円滑な接続が重視されている中、幼児期から児童期への移行に伴う人との関わりや協同的活動の変化が思考力に与える影響について検討し、保育者・教師の関わりの効果の実際についても明らかにすることで、より良い指導・援助や接続の形を考えることが可能になると考えられる。

本研究では、幼児期から児童期を対象に、子どもが思考力を発揮する時に仲間あるいは保育者・教師との間にどのような相互作用が起きているのかを調べ、その相互作用の特徴が加齢に伴いどのような発達の变化を示し、そして、「人との関わり」のどのような側面（要因）が子どもの思考力の発達に影響を与えるのかについて明らかにする。

## 研究の進捗状況

実験的手法を用いて実施予定だった研究1は、2020年初頭に新型コロナウイルスの感染が急拡大したことに伴い、協力園との協議により、実施直前に中断・延期されている。

研究2では、質問紙調査により、実際の保育の現場では協同的活動と子どもの発達に関連性についてどのように捉えられているのかについて明らかにする。本稿では本年度実施した研究2の調査結果の経過を報告する（データ収集は継続する予定であり、統計的な分析は未実施である）。

## 研究報告

1. 調査対象者 現役保育者68名（保育者経験年数1年未満：1名、1年以上3年未満：15名、3年以上7年未満：12名、7年以上：40名）
2. 調査時期 2021年度幼稚園教諭免許更新講習（8月）および保育士キャリアアップ研修（10月）において実施した。
3. 材料 子どもの協同活動に関して、保育の中で感じていることを記入するよう求める質問紙を用いた。協同活動が子どもの発達に影響を与えると感じるか、協同性がいつ頃発達し始めると感じるか、また、自身の保育の中でどのように協同活動を実践しているのか等について、回答を求めた。子どもの発達に与える影響については、イギリスの保育の質の評定尺度「ECERS-E」（秋田・佐川，2011；Sylva, Siraj-Blatchford, & Taggart, 2011）をもとに、保育に関連の深い子どもの能力をピックアップし、その中から特に影響を与えられる能力を選ぶよう求めた。質問項目は合計8項目（選択式5項目および自由記述式3項目）である（具体的な質問項目はTable 1に示した）。

Table 1 質問紙調査で用いた質問項目と内容

項目	質問内容	形式
1	保育をされてきた経験の中で、年齢的にいつから協同的な活動を行うのに適切であると感じるか教えてください。（協同活動の芽生えとしての活動も含みます）	単一選択
2	これまで保育をされてきた中で、協同的な活動の実践に取り組まれたことはありますか	単一選択
3	【Q2で「はい」と回答された方のみ、ご記入ください】何歳児のいつ頃に行われました	複数選択可
4	【Q2で「はい」と回答された方のみ、ご記入ください】これまで実践されてきた協同的な活動の例と年齢クラスを教えてください。	自由記述
5	協同的な活動を行うことが、子どものどのような能力の発達に影響を与えると感じますか。影響を与えると感じるものを全て選んでください。	複数選択可
6	Q5でご記入いただいたもの以外に影響を与えると感じるものがあれば、お書きください。	自由記述
7	保育者として協同的な活動を促すためにどのような関わりが重要だと考えますか。ご自分の考えをご自由にお書きください。	自由記述
8	子どもの協同的な活動を促すために環境面において工夫されていることがあればご自由にお書きください	自由記述
9	保育者としてお仕事されてきた経験年数（離職期間がある場合は合計）をご回答ください。	単一選択

4. 方法 質問紙調査をインターネット上で実施した。調査目的に関して事前説明を行い、協力の同意を得られた場合にのみ回答を求めた。調査の実施にあたり、情報気密性の面で安全性の高いSSL形式の暗号化を行うシステムのアンケートアプリケーション「Questant」を用いた。また、回答者の氏名など個人を特定できる情報の記入は求めなかった。

5. 結果

- ① 協同的活動を展開した経験の有無：実際に取り組んだことがある保育者は全体の82.4%だった。
- ② 協同的活動を展開する年齢：協同的活動を展開するのに適した年齢については、「3歳児クラス2学期」とした回答が最も多く(27.9%)、次に「4歳児クラス2学期」(26.5%)、「3歳児クラス3学期」(19.1%)となり、4歳児クラスおよび3歳児クラス

Table 2 協同的活動の実践例

事例No.	年齢	事例
1	3歳児	3歳児クラスであったが、上に兄弟がいる子どもが多かったので、言葉も多く使っていた。そこで、3歳児2学期頃にバーベキューごっこを展開した。きっかけは、ダンボール素材を置き、それを台にしてダンボール片を鉄板に見立てた遊びが発展して、皆が必要な物を作り始め、ごっこ遊びが進んでいった。
2	3歳児	3歳児クラス夏、秋で、集団製作として虫の木、栗の木作りを行う。折り紙で折ったセミや栗を木に飾りたいという声上がり、全員で考え、作り上げた。
3	3歳児	3歳児クラスの3学期に自分のグループを決めたりした。それまではこちらが決めていたが、少しずつ自分の意見を伝えられるようになったため行った。
4	3歳児	3歳後半 簡単なルールの協力して行うゲーム(ボール運びリレーなど)を通して、友達と協力し、相手の存在を感じたり、良さを知ったりするきっかけとなるような活動を取り入れた。協同的な活動に取り組むことへ向けての芽生えとして、この時期に行うようにした。
5	4歳児	4歳児 運動会で使う船作り おばけやしき 水族館作り ハロウィンで使う装飾作り
6	4歳児	廃材を使った動物園を4歳児1月頃に行いました。動物園に行った経験からみんなでどんな動物がいた？足はどんなだった？きばは？など細かく考えながら図鑑や絵本なども参考にして立体的につくりました
7	4歳児	製作活動 夏祭りごっこに向けて意見を出し合って製作物を作る。苦手な子どもには得意な子どもが自ら教え合う姿がみられた。 4歳児6月
8	4歳児	まちづくり・4歳児クラス 大きな紙に道路、建物を描き込むことを提案すると皆自由に始めるが、そのうち信号はどうするか、段ボールで電車や消防車、救急車などを作りたいと意見がでる。発達の早い子どもが中心となり、火事の現場や病院も必要だという事で、どうするか話し合い、ビルに見立てた段ボールに炎として赤い紙を貼ったりして遊んだ。乗り込める様に作った電車は遊ぶうちに破け始めたが、ガムテープで補強したり、引っ張るより押す方が壊れにくい事を発見した。
9	5歳児	5歳児クラス 6~8人くらいのグループに分かれ、『あったらいいなと思うロボット』というテーマで共同製作を行いました。子ども達で話し合い、設計図を描いて様々な素材を使って協力して1つのロボットを作り上げていました。
10	5歳児	運動会の取り組みにおいて、リレーの走る順番や当時の曲決めなど、子どもたちがどんな運動会にしたいのか、みんなで話し合い決めた。5歳
11	5歳児	5歳クラスで、お菓子の空き箱や卵のパックなど色々な素材を用意し、テーマを与えてからグループで一緒に作っていくことをしました！その時のテーマはお化け屋敷のおばけです
12	5歳児	5歳児 普段から子どもが中心で遊びを展開させていくような保育だったので、毎日が協同的な感じでした。リーダーシップの取れる子どもと逆に意見の言えない子や興味のない子をどう関わらせるかが大変だった印象です。
13	異年齢	3、4、5歳児 異年齢クラス 夏祭りの準備 製作だけでなく当日の雰囲気作りや場所作り、進め方などを年長を中心にして子どもたちでやってもらった。店番なども異年齢で子どもたちで。

スが全体の7割近くを占めた。協同的な活動は幼児教育の中でもレベルが高いものになるため5歳後半頃に目指すべき活動になるが、必要とされる力は幼児期に芽生え育っていくと考えられる。この結果から、3・4歳で既に協同的活動の萌芽があることを保育者が感じ取っていることが示された。

- ③ 協同的活動の実践例：協同的活動の実践例として挙げられた事例（のべ）のうち、3・4・5歳児それぞれについて詳しい記述がみられた12例および異年齢での実践例1例の合計13事例をTable 2に示した。各年齢において、個々の子どもの特徴とやり取りに関する記述が見られ（事例No.1、事例No.7、事例No.8、事例No.11）、保育者が個々の子どもの性格や発達状況・生活環境等をふまえて協同的活動におけるやり取りを受けとめていることがうかがえる。
- ④ 協同的活動によって子どものどのような力が育まれると考えられるか：最も影響を与えたと考えられた能力が「協調性」（95.6%）であり、次いで「想像力」「社交性」（どちらも79.4%）、「言葉の力」（76.5%）、「自己調整力」（72.1%）、「推論能力」（67.6%）であった（Figure 2）。また、自由記述の回答より、選択肢として挙げた能力以外に「達成感」「自己肯定感」「場の空気を読む力」「程よい緊張感の体験」「何を今しているかを考える気づく」等があげられた。これらの結果から、協同的活動によって、思考力に関わる力以外に、コミュニケーションに関わる力、および、自己調整に関わる力が育まれるという実感があるのだと考えられる。

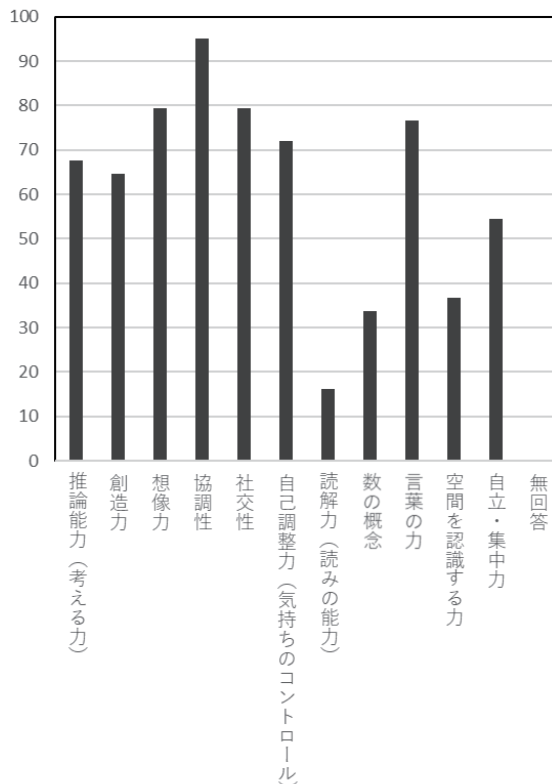


Figure 1 協同的活動によって育まれると考えられる力

- ⑤ 協同的活動に対する援助：協同的活動に対して行う援助および環境面における工夫について、詳細な記述のあった10回答をそれぞれ Table 3 に示した。援助および環境面への配慮のいずれにおいても、直接解決を指示するような関わりを行う回答はほぼ見られず、「足場かけ」や見守りを心掛けた援助、および、人間関係の構築の促進および場や時間の確保を目指した環境設定を行っていることがうかがえる。

Table 3 協同的活動に対する援助の例

援助にあたり心掛けていること
適度な距離感をもちながら関わる。(子ども同士で生まれるアイデアややりとり、会話が発展するよう最低限の助言と発展を見守る姿勢) 保育者の誘導だけになってしまわないよう、子ども主体の活動ということを念頭に置く。
保育者自身もじゅうぶんに楽しむこと。行き詰まった時に助言はする。みんなで考えて、取り組む楽しさを味わえるように促す。
直接答えは言わず、子どもたちの考えが広がるような言葉掛け
子どもが興味を持てる絵本や興味をもったらすぐに子どもたちと話し合える場が必要。また、興味を深められるように何を留意していくかという保育者の知識が必要と考える
見守る姿勢をとりながらも、個々の発言や行動を見逃さず拾っていき、必要に応じてそれを全体へ伝えていく。時には保育者も同じ目線で子ども達の中に入り、一緒に考え、活動していく。
やってみたいと思えるような雰囲気を作ること。一人ひとり得意不得意がある(学年に関係なく)ので、そこに合わせた活動が行うよう見極めて時にはこちらで整えることもする。
きっかけや環境の設定は、保育者が作りますが、そこから先の活動は、子どもたちの考えや言葉に耳を傾け進めていくのがよいのではと考えます。
完成までのわくわく感と、子ども自身が作り上げている!と思える瞬間場面
子どもから意見を出してもらおうと、はじめに発言したこの意見によって行きやすいが、1つ一つの意見を尊重し認めて行くことで、全体で考えたり、発言しやすい環境や雰囲気を作ることが大切だと考えた。
子ども同士の信頼関係(失敗しても馬鹿にされたり離れていかない) 心理的安全性(どの様な意見でも受け入れられる) 成功体験を積んだ経験、自信
環境構成にあたり心掛けていること
製作活動の場合はなるべく子ども達が自由に選んで自由な表現を楽しめるような様々な素材、道具を用意する。
保育者が遠くから見守るようにする。(子どもによっては保育士の目を気にして思うように発言することが出来ない。)
興味が出て欲しいものを自然と保育室に置いておく。絵本の世界に入って欲しければその作品に出てくる道具など。
自由に扱える教材資材が豊富であること。取り組めるだけの時間が確保されていること
みんなの顔が見えるよう、輪になって座る、話し合いの経過が分かりやすいようホワイトボードなどを使用して記録すること
子ども自身でできることはできる限りやってもらう。そのためにも動きやすい、子どもが手に取りやすい位置に使う物を用意したり、日々同じ流れになるように日課を組んでいる
人数を少なくして、集中力を高める。やっていることのどんなことでもほめる。子どもたちと一緒に準備片付けも行う。終わったあとに、活動のふりかえりを行い自分の言葉で表現しました、他のこのどもの意見も聞く時間を作る。
製作や話し合いには参加させたい子と今は参加したくない子をコーナー分けをすることから始める。日々を重ねることでやる気に刺激が加わり協調製作が生まれる
子どもの性格や個性をふまえたグループ作り。リーダーシップがある子、想像力がある子、なかなか自分の意見を言えずにいる子などをバランスよく振り分けていく。また、自由遊びではあまり遊ばない子などとも関わられる機会にする。
1人の疑問や感動を共有できる話し合いの場をつくる



## 今後の課題

来年度は実験を再開できるよう園との交渉を進め、かつ、並行してインターネットによる質問紙調査を継続していく予定である。研究2では保育者を対象にした意識調査を行っているが、幼児教育から小学校教育への円滑な接続と思考力の発達についての検討を視野に入れると、小学校教諭を対象にした意識調査も行っていく必要があるだろう。

※本研究は鎌倉女子大学倫理審査を通過：審査番号鎌倫-19008・鎌倫-20018

## 引用文献

秋田喜代美・佐川早紀子（2011）, 保育の質に関する縦断研究の展望, 東京大学紀要, 51, 217-234.

Dahlberg, G., & Moss, P. (2006) *LaNostraReggioEmilia* Rinaldi, C. In *Dialogue with Reggio Emilia*, Routledge. (ダールベリ G.・モス P. (2019) リナルディ C. 里見実 (訳) レッジョ・エミリアと対話しながら：知の紡ぎ手たちの町と学校, ミネルヴァ書房 pp.1-31)

無藤隆 (2011). 保育の学校, ミネルヴァ書房.

OECD (2013). *Country-Note: Programme for International Student Assessment (tPISA)*

*Result from PISA 2012.* (<https://www.oecd.org/pisa/keyfindings/PISA-2012-results-japan.pdf>)

佐藤康富 (2018). 幼児期における思考力の深化過程に関する研究 鎌倉女子大学紀要, 25, 89-99.

田村 徳子・荒牧 美佐子 (2012). 子どもの学びの育ち ベネッセ次世代育成研究所幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書, 26-45.

内田伸子・津金美智子 (2014). 乳幼児の論理的思考の発達に関する研究—自発的活動としての遊びを通して論理的思考力が育まれる— 保育科学研究, 5, 131-139.

ヴィゴツキー 柴田義松 (訳) (2001). 思考と言語 新読書社

Sylva, K., Siraj-Blatchford, I., & Taggart, B. (2011), *The Four Curricular Subscales*

*Extension to the Early Childhood Environment Rating Scale® (ECERS), 4th Edition with Planning Notes.* (平林 祥・埋橋 玲子 (訳), (2018), 新・保育環境評価スケール3 〈考える力〉, 法律文化社.